

地縁文化の構造に関する試論*

A Study on Structure analysis of Culture Affiliated to Land

○尾仲 章**

佐佐木 綱***

By ○ Akira ONAKA

Dr. Tsuna SASAKI

Planning of civil engineering infrastructure is usually based on natural and social conditions of planned area. But, in order to lessen conflicts between residents and planner, planning has to reflect meaning of culture affiliated to land of planned area. This paper deals fundamental structure of culture affiliated to land.

1. まえがき

土木計画においては、物理空間や社会空間の他に「意味空間」を把握してゆく必要がある。

意味空間は風土との関連が強く、象徴的な形をとることが多い。その一部として地縁文化が考えられ地域住民の深層を理解する手がかりとなろう。

無意識でお互いがつながっている一体感の日本人社会では、この意味空間への配慮なしでは、土木計画が困難である。

2. 風土と地縁文化

(1) わが国の風土と精神文化

わが国は周囲を海にかこまれた島国であり、平原がいたるところ緑と美しい流れに富む風景で満ちあふれている。規則的な四季の変化があり、熱帯から、亜熱帯まで気候上の幅が広く、日本の気象はバラエティに富んでいるといえる(1)。

このような自然環境の中に人口稠密な社会が成立して、人間と自然とが組合わさって、わが

国文化が形作られてきている。谷嶋喬四郎氏によれば、文化を上部構造、風土をその下部構造とみて、模型的にうまく説明している。

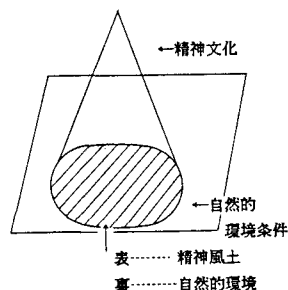


図-1 精神風土と自然的環境
(谷嶋喬四郎氏による)

いずれにしても、自然と人間の精神構造とは密接な関係があり、自然環境によって、民族固有の性格、文化の性格もつくられてきた。環境は、性格の決定に大きな役割をもっている。わが国は温和な気候のゆえに、温和な精神風土となっており恵まれた自然の懷に抱かれて現実の生活が則幸せであった。自然に神がやどる汎神論的自然観を持つようになり、一種の自然宗教である。後に入った仏教も、日本では現世的なものになっている。

(2) 地縁文化の地域分布

地縁文化は歴史的文化遺産として、全国に分布する、神、仏像をはじめ、民話、神話、祭、民芸など庶民生活に生きつづけている庶民文化のことである。

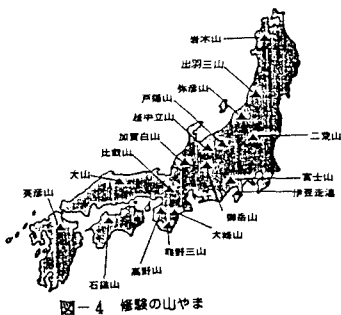
庶民信仰の代表的なものである聖天、稲荷、修

* キーワーズ：土木計画全般、計画論
(地縁文化イメージ計画)

** 正会員 横浜市道路局専任主幹
(〒231 横浜市中区港町1-1)

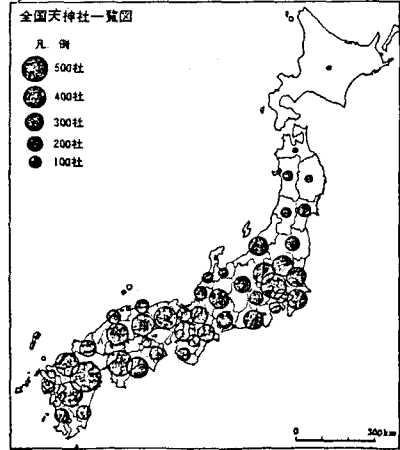
*** 正会員 工博 京都大学教授
工学部交通土木工学科
(〒606 京都市左京区吉田本町)

験道、熊野、天神の地域分布（図2、3、4、5）から見て、次の3分類に分けることができる。



出典：「美しく豊かな日本のふるさと熊野
新しい熊野のくにつくりにために」
5.6.3 新宮市。（財）防災研究協会

図-5



竹内秀雄『天國宮』346ページによる。明治33年、天國宮は10,442社。また明治43年刊『北野誌』には11,089社という。

出典：米山俊直著「天神祭」 5.4. 中公新書

- ① 大都市並に東北型 …… 聖天、稲荷、熊野
- ② 西日本並に関東型 …… 天神
- ③ 裏日本並に紀伊、伊豆山地形 …… 修験道

聖天は仏のなかの格からみて、如来、菩薩、明王の次の天部に属しており、永久に仏の世界では庶民である。気楽さ、現世利益の能力の面で、商人、芸人、農民の熱心な信仰対象とされてきた。

天神はもともと天のカミ、自然神、精霊であったものが、菅原道真の御霊信仰と結びついて、宿場、港、城下などの町に発生して行ったものとされている。その関係から交通の便、交易の盛んなところに分布しているとみることができよう。修験道はわが国古来の呪術信仰の形をとどめ、神仏習合されたものとして伝承されていて、わが国固有の山岳信仰の姿を見ることができる。

この3つの地

域分布の類型は

わが国気象の大

分類（図-6）

とも類似しており、

地縁文化が

交通の便、土地

利用、職域階層

とともに、風土

との結びつきの

強いことを物語

っている。



図-6 気象からみた日本に地域
参考資料(1)より転載

3. ユング心理学からみた地縁文化

(1) 普遍的無意識

無意識には個人的なものと普遍的なものがあるというのがユングの主張である。普遍的無意識は人類全体や、あるいは民族的に、または家族的に共通のものである。

地縁文化は、この普遍的無意識の表象可能なものの表現であるから、その地域住民、広くは国民に与える影響は時代の変遷に無関係であって永久不変のものと考えられる。

(2) 東洋と西洋

東洋は心の内的世界について、自己の問題について西洋よりはよく知っていた。西洋の心は意識を意味し、東洋では無意識を含めて呼んでいる。

地縁文化は自己実現のためのより高次の統合性を求めてゆく人間の障害を見守るものとして、古い時代の遺産の象徴の形で現在に伝承している。自我を中心とした思考の世界に基づく科学至上主義、産業至上主義の西洋文明に片より人間疎外の叫ばれる今日こそ古い東洋の心を取りもどし、東洋の心と西洋の科学との統一性を実現し、創造のエネルギーを生き返らせなければならない。

4. 地縁文化の基本構造

(1) 母性社会と陰陽バランス

日本は母性社会であるといわれる。母性原理の強い国であるからである。母性原理とは「包含する」機能があり、その肯定的な面で生み育て、否定的なものでは、呑み込み、しがみついて死に到らしめることである。母性原理に基づく論理観は「場」の平衡状態である。父性原理のものは「切断する」機能から、建設的な面と破壊に到らしめる面があり、「個の論理」と呼ぶものである。

このことは陰陽五行思想にもあらわれている。陰陽思想は万象を陰陽二元の対立においてとらえるが、五行、すなわち木火土金水で方向を示す場合、東一木、南一火、中央一土、西一金、北一水となつて、土は大地で中央を意味している。このように「育てる、呑み殺す」母性原理の土気を陰陽五行説では中心に置いているのである。(5)

(2) マンダラ構成原理

① 包括的な見方

マンダラによって知識、即ち単なる仏教の教えよりも完成したものとしての全体の性とか、生命力といったものが表現されているという見方が重要である。胎蔵界は「包括する」意味から、「統合」を、また、金剛界は「切断する」意味から「分析」を表わし、両界マンダラで全体性を示しているといえよう。(6)

② 父性、母性原理の見方

マンダラは胎蔵界が母性原理、金剛界が父性原理を示しているといわれているが、わが国でも古くから明治にいたるまで用いられてきた陰陽五行や、インドで生まれたタントラ思想も父性、母性の両原理によって成立していることが分かる。

(3) 神と仏

神と仏の関係は、わが国地縁文化の基本的な構造要素であり、相互補完的であり、協調、統合の関連性をみることができる。神仏習合の歴史的事実は、日本文化の雑種性、重層性をあらわしている。(7)

(4) 象徴性

地縁文化の重要な役割を占めている密教の代表としてのマンダラは、金剛界マンダラは男性を、胎蔵界は女性を示し、象徴として人間に共通する心像を現わしているといえる。ユングは象徴を形成する人間の能力のあることを重視し、象徴こそが創造性を高めるものであるとしている。(4)

(5) 土木計画に関連する基礎的イメージ

① 遷宮思想

a. 伊勢遷宮

伊勢神宮の遷宮は20年ごとに行われるが、これは日本の古代信仰の輪廻を象徴した神の有り様を示している。吉野裕子は「隠された神々」で、東西のみ敷地は北に鎮座する荒祭宮を太極とし、それから派生した陰陽の両儀とみられるが、これは中国哲理の造型とも考えられると述べている(図-7)。また、二十の二は、陰陽両儀を意味し、二十年遷宮は中国思想と古代日本信仰の習合の結果とも思われるのである。

中国の陰陽五行思想は、「太一陰陽五行思想」とも呼ばれ、「太一」……一元思想、「陰陽」……二元思想、「五行」……

循環原理

を合わせた宇宙創成の原理を示すものと考えられている。日本の古代信仰も同様の共通点

がある。吉野裕子「隠された神々」より

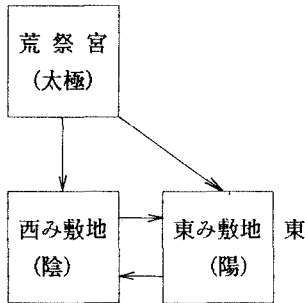


図-7 太極としての荒祭宮

b. 古代遷都

この遷宮思想は、御代の交替ごとに、皇居や都を移していることにも表われている。母の胎とか、蛇の脱皮に見立てられた皇居や首都を捨てることは、古代の呪術からきたものであろう。この古代の遷都が北の方向に行われたのは、陰陽五行の北を太極と考える思想に依拠したと吉野氏は見る。

そして、天智、天武、持統朝になると子午軸が重視され、持統天皇の吉野出遊は在位中三十一度に及ぶが、大和→吉野は北→南軸であり、子→午（陽の道）、午→子（陰の道）の循環の呪術により、四季の順当な循環への祈願を行ったとも見られている。

c. 道路計画における遷宮思想

京浜間や阪神間などの交通量の集中する地域では、いく種類からの道路が建設されている。

阪 神 間	京 浜 間
国道2号	国道1号
国道43号	国道15号
阪神高速大阪神戸線	首都高速横浜羽田線
湾岸道路（建設中）	湾岸道路（計画・建設中）
名神・中国道	第3京浜
	東名高速

いづれの道路も、供用当初は大阪と神戸、東京と横浜という二地点間を結ぶ目的は同一であるが、容量的にまかないきれず、次々と新たな道が作られていた。新生脱皮をはかる遷宮、遷都の思想がここに生きていると見る事ができる。

② 方位イメージ

a. 風水思想

地域の環境把握の方法として風水思想がある。これは古代・中世の遷都に決定的影響を与えたといわれている。中国古来の気学思想に基づくもので、天を流れる気＝風、地を流れる気＝水が地相判断の基準であったのである。陰陽五行説でいうところの「四神相応の地」は、

北＝玄武（黒）、亀と蛇の合体獣、山の象徴

東＝青龍（青）、川の象徴

南＝朱雀（赤）、池、湖の象徴

西＝白虎（白）、主要道路の象徴

これらの四神が齊つ土地のことである。

都市計画、住宅設計、墳墓の装飾、相撲の柱などにこの古代の土地のイメージ的観相の思想が生かされている。

b. 古代の方位信仰

i) 東西軸

古代日本人にとって、東西軸は、太陽の動きに合わせて物事を考え、東＝神界、誕生、男の境域、西＝人間界、死、女の境域とし、中央＝都、穴、擬似母胎と意味付けられている。古代信仰軸は水平の東西軸であって、その痕跡は村の祭に多く残っている。

ii) 南北（子午）軸

しかし、中国の陰陽五行思想が導入されてから天地の立体軸を水平に移した北方を神聖視することとなる。子午線は万象における陰陽を分ける線で、北→南は陽の道、南→北は陰の道といわれ、陰陽の輪廻で宇宙の循環、万物の生育が達成できるものと考えたのである。667年～794年の間に6回遷都されたとき、いずれも同一の南北軸上に限られていたのも、この理由によ

るともいわれている。(8)

また、同時代に吉野詣、熊野詣がくり返し行われた背景に、陽の道、陰の道の循環による四季循環への祈願、そのための呪術ともみられている。大和 — 吉野 — 熊野は同一子午線上にあるのである。

iii) 四方仏

顕教四方仏といわれている東西南北の仏は、東方浄土の過去世の薬師仏を東、太陽の沈みゆく西方浄土の未来世の阿弥陀仏を西、その中央南に釈迦如来、釈迦去って後五十六億七千万年後に出現し如来となる弥勒を北に配置している。(9)

わが国では天平時代終わりまでは弥勒像が中心に仏像が作られ、「釈迦に還れ」を合言葉に弥勒信仰が中心であった。仏教の南北軸が信仰対象とされた時代と、前述の遷都や吉野詣、熊野詣が南北軸でくり返された時期とが合致していることは興味深い。

釈迦、弥勒の次元の信仰から、次に西方浄土を願う阿弥陀信仰、そのあとが東方薬師に移行し、信仰の軸も南北軸から東西軸に移り、さらに、信仰方位は西から東へ移行して行ったことが分かる。

iv) 幹線道路軸

日本の高速道路網の整備は縦軸（ほぼ東西軸）が終わり、横断道、即ち南北軸の時期に入っている。このことは海外との技術交流の面でもいえる。欧米諸国に追いつけ追い越せの東西軸の時代から、発展途上国援助の時代に移り、南北軸になっている。

近世日本の陸上交通路で生活の道といわれる「塩の道」（富岡儀八「塩の道を探る」岩波新書58年）は全国的にみてほとんどが南北方向の道である。

古代の交通路としては、五畿七道に区分されていた頃（8世紀）からみやこと太宰府を結ぶ道路を第一幹線として各道へ通ずる道路があったが、いずれも東西方向である。

政治、経済の道が東西軸、生活、文化の道が南北軸になっている。

5. マンダラ造形原理の応用（TK法）

(1) TK法

マンダラには胎蔵界と金剛界があり、その原則的な意味は、母性原理と父性原理「包括」と「切斷」、「統合」と「分析」を表している。これをTマンダラ図、Kマンダラ図で図示することで、思考過程を整理すれば、統合性のとれたまとめ方ができる。この方法を「TK法」と呼ぶこととする。(MY法とよばれる方法が経営学にも応用されている。(11))

TK法の応用方法は数々あるが、ここではその一つを紹介することとする。

(2) TK法を応用した道路整備率評価手法

① 新しい評価手法の考え方ベース

住んでいるところから、速やかに幹線道路に行きつけば（これを対外アクセスビリティと呼ぶ）その地区は道路整備が進んでいると考えられるはずである。この場合、行きつくべき幹線道路が密にあり、その幹線道路に行く道路が良いことが必要であり、これらの要因を内部要因と考えることができる。

一方、道路の内部要因が良くても、利用する人口が多すぎたり、通過交通量が多くて走りにくかったり、また鉄道が発達していなくて（外部要因と考えられる）道路にどうしても依存するような地区は道路整備がおくれているといえよう。

このように、対外アクセスビリティを内部要因別に評価し、利用の利便性を外部要因別に修正して、総合的な道路整備の評価とすることができる。

② 評価要因別の評価基準

a. にじみ出し難易度（補助幹線道路間隔）

b. にじみ出し速度（自然発生旧道率）

a, bは住んでいるところから幹線道路まで、にじみ出していくように考え、その難易さ、速さを評価するものである。自然発生旧道は、未改良の道路のことである。

c. 内部アクセスビリティ

（標準幅員充足率）

d. 外部アクセスビリティ（幹線道路密度）

a～dが対外アクセスビリティ評価要因であり、道路整備率評価の内部要因であるのでTマンダラ図（図－8）で示すことができ、総合得点で基本評価値を求める。

e. 夜間人口密度 …… 道路利用需要度

f. 通過交通量率 …… 利用利便性

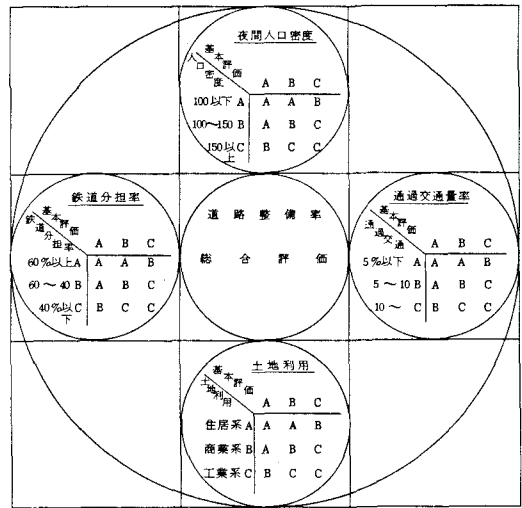
g. 土地利用 …… 利用需要と依存度

h. 鉄道分担率 …… 道路依存度

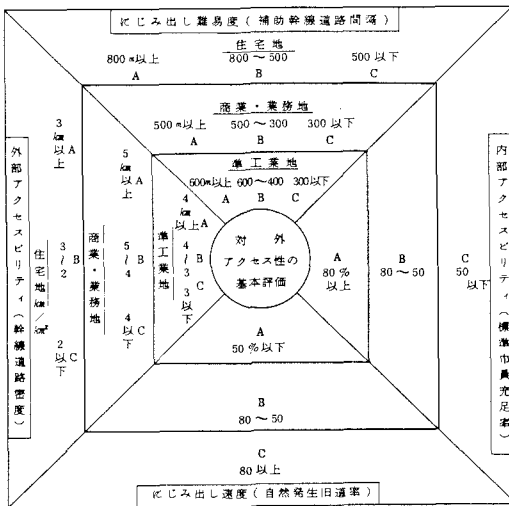
いずれも外部要因であり、Kマンダラ図（図－9）により修正しながら、総合評価を求めることができる。

今後、マンダラの多方面への応用が考えられる。

図－9 Kマンダラ図法による「道路整備率」の総合評価（市内の例）



図－8 Tマンダラ図法による「道路整備率」のうち、対外アクセス性評価



ステップ3 対外アクセス性基本評価を（内部要因）

6. 土木計画への応用

(1) 道路計画への応用

① 道路のシンボル性

河川が水を流す通路である如く、道路は人や自動車、自転車を通す通路である。

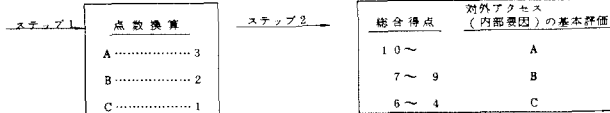
何人も通行することができる公共性が極めて高いものであって、その意味から、道路の元型は母性的なものであるといえる。

河合隼雄博士は「創造性に伴って、新しいエネルギーが自我にもたらされるが、その運び手となるのはシンボルである。」としている。シンボルによって新しいエネルギーが沸き出ること考えると道路に創造性を持たせるためには道路にシンボル性を持たせることである。

道路の修景は見にくいものを隠すとか整理整頓するとか、美しく見せるための化粧が目的ではない。設計者は土木施設を通じて利用者や周辺の人々に語りかけているのであって、そのシンボル性の強さを認識しなければならない。

② 道路の病理と治療—心理療法に関連して—

ユングによれば、各個人はおのおのの最も得意とする心理機能を持っており、四つの根本機能として思考（thinking）、感情（feeling）、



感覚 (sensation) , 直観 (intuition) を区別して考えた。思考と感情, 感覚と直観は相対立関係にある。感情と感覚は無意識の中に、思考と直観は意識の中にあるという。

道路についても、道路の元型として、「歩く道」と「母性道路」があり、いずれも日本人の無意識のなかに存在している。「歩く道」と対立的なものとして、「道路の多様化」があり、「母性道路」と対立するものとして、「道路の象徴化」があろう。元型として日本人が持っている母性道路を、直観的にとらえているのは、道路のシンボル化を通じてである。

道路の元型をあまり追求しても、現実には完全なものを得ることは不可能に近い。対立的な存在の道路を、多様化や道路の象徴化によって、変化に富んだ道路計画となることがある (図-10)。

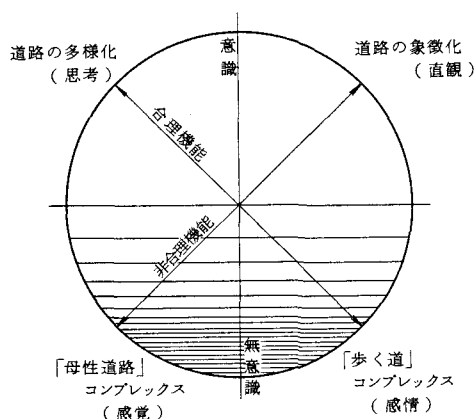


図-10

外環の関越・常磐の基本計画 (57年1月) を決定したが、ここでは、専用道路 (父性的) とともに下水道・綾瀬川放水路 (母性的) を併設構造にしたり、川口市安行地区では緑地帯8mを含むモデル道路 (母性的) を先行建設したりして、住民の理解の努力が実った結果であった。環状道路の機能としては父性原理が強いので、かなり広域にわたり影響を及ぼす母性原理の作用する施設 (母性道路・排水路・下水道・

緑地・集会所・ターミナル等) を合せて計画する必要がある。

(2) 河川計画への応用

① 地縁文化から見た河川対応

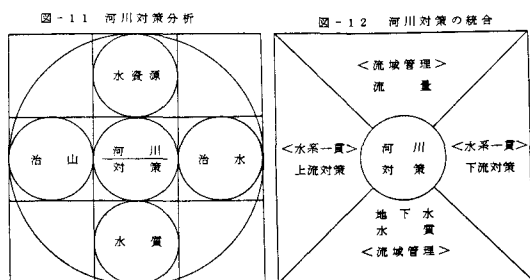
a. 陰陽五行説の例

「陰陽五行と日本の民俗」(吉野裕子)によれば、千葉県高葛郡福田村三堀の香取神社例祭は「泥祭り」であって、利根川洪水に対する民衆の願いとして水を土で抑えようとする祭とされているが、これは陰陽五行の「土剋水」の原則に由来するものとみられる。

b. 両界マンダラの例

TK法により、河川計画の構成要因や思想を整理してみることににより、全体的な位置づけが明確となるはずである。

河川計画の構成要因や思想は、治山、治水、利水、水質など、その対応は多様であり、また、その内容は分析的であるのでKマンダラ図 (分析の意味) (図-11) で対応できるものと考えられよう。他方、Tマンダラ図 (図-12) の意図する総合性に対応する計画手法や思想があるはずであり、これが近年強調されはじめた水系一貫、流域管理などの統合治水の思想に対応するものと考えられよう。TK法で検証することにより、河川計画全体における、欠けている面、今後充実すべき分野などを見出すことが可能となる。



② 地域コンプレックスと対応した河川計画

河川計画の無意識として、わが国古来の自然流 (合理機能) と水にまつわる祭礼 (非合理機能) が元型ではないかと推測される。河川計画の元型といえる自然流も、江戸後期となると意識化が色々の分野で強調されてきたためか、そのあらわれとして、新田開発のた

め河川工法も紀州流といわれる堤防主義としゅんせつが中心におし進められることとなった。近代になって、非近代的なものとして忘れ去られようとする対洪水呪術のようなものが消えて行くのと代替のような形で、住民運動が顕在化してきている。

住民の無意識層に生きつづけているはずの元型に対応する適切な意識化の努力が必要となってきたといえよう。

合理機能の無意識元型として考えられる古来の自然流河川工法に対しては、近年の河川計画のなかで水系一貫、流域管理の考えが重視されてきたことが適当な対応と思われる。また、民衆のいきつづけてきた水にまつわる祭礼という無合理機能の元型に対応して親水性のある河川公園化、地元中心き水防演習、洪水予報、浸水予想地図の公表などの対策を水に関する祭の構造に近づけるよう構成していくのが望ましいと考えられる（図-13）。

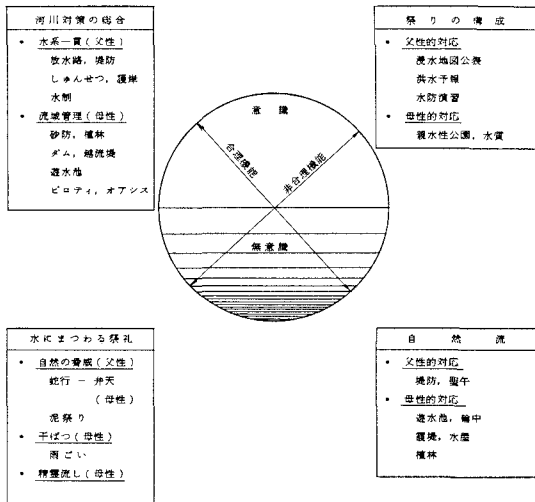


図-13

(3)都市計画への応用

— 都市シンボルとしての南北軸 —

日本の街路パターンは格子型が基本であり、西欧の町の無秩序な街路網と対照的である。日本の主要都市（県庁所在地、指定市）の都市軸（幹線街路の方位）を調べると、77.6%の都市が南北軸を主軸としており、日本の都市形成が

南北軸を中心に成立してきていることが分かる（表-1）。わが国古来よりの子午軸重視の結果ではなからうか。この子午軸がわが国の都市の意味空間形成に重要な役割を果たしており、シンボルともなっている。

表-1 主要都市（県庁所在地、指定市）の都市軸

	南北軸都市			東西軸都市		
	直	東傾斜	西傾斜	直	北傾斜	南傾斜
都市軸						
都市数	9 (18.4%)	24 (49.0%)	5 (10.2%)	0	2 (4.0%)	9 (18.4%)
平均傾斜角		17°	11°		12°	24°
平均	東傾斜 9°			南傾斜 16°		
全体平均	東傾斜 24°					

7. むすび

地縁文化は、日本人の深層のなかに生きており、その構造原理をとらえ、さらに地域特性を把握することによって、より充実した土木計画が作れるはずであり、本研究はその一端にすぎず、阪神高速道路公団の行っている「地縁文化と都市高速道路のイメージ」研究など、今後この分野の研究開発、応用が望まれる。

参考文献

- (1)宮川英次「風土と建築」（彰国社 S.57）
- (2)栗坂 諭「聖天信仰」（日本経営出版会 S.49）
- (3)南日義妙「稻荷をたずねて」（文進堂 S.55）
- (4)河合卑雄「ユング心理学入門」（培風館 S.56）
- (5)吉野裕子「陰陽五行と日本の民俗」（人文書院 S.58）

(人文書院 S.58)

- (6)松長有慶「曼荼羅一色と形の意味するもの」（大阪書籍 S.58）

(大阪書籍 S.58)

- (7)山折哲雄「神と仏」（講談社 S.58）

- (8)吉野裕子「隠された神々」（講談社 S.56）

- (9)佐伯快勝「仏像を読む」（大和書房 S.59）

- (10)富岡儀八「塩の道を探る」（岩波新書 S.59）

- (11)松村寧雄「経営を活かす曼荼羅の智慧」（ソーテック社 S.59）

(ソーテック社 S.59)